氏名	XU　LIJING
ヨミガナ	キョ　リキセイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第627号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　自己の他者－中国人女性写真家はいかに個を表現してきたか 〈作品〉　女ᄉ（女としての私） 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤　時啓
（論文第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤　俊治
（作品第１副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	荒木　夏美
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	鈴木　理策
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

新中国の誕生、文化大革命、改革開放、計画生育政策、グローバリズム等、社会の変遷を経験してきた社会主義国の中国において、女性写真家、アーティストたちの才能を捉えるために、時代の変遷がいかに個の意識と芸術表現に影響を与えたかを示す必要がある。このことは、筆者が長年にわたって写真表現を学び、研究を行ってきたなかで、最も関心を寄せ、明らかにしたいイシューである。

そこで、中国の歴史的背景を踏まえ、社会的、文化的表象を参照しながら、独自のパーソナリティを持つ具体的個人の意識を核に、あえて結果を予見せずに作品制作に取り組み、1949年の新中国の誕生以来2019年までの間、異なる年代を生きた女性写真家たちを対象に、「アーティスト」という各個人の属性を構成してきた背景、制作のモチベーション、表現手法などについて調査と研究を行った。その結果、異なる時代要因がそれぞれ内包されているものの、どのような歴史的時期に身を置こうと、女性でありながらも、女性という社会的性別とは一定の距離を置いた他者意識を保っていることを、世代の異なる女性写真家たちに共通の現象として、おのおのの創作活動からうかがい知ることができた。ここで述べる「他者意識」は、意識的に女性のセクシャリティと一線を画すのではなく、創作行為を自我を反射する鏡とし、アイデンティティを確立しつつ、個の存在を確証する意識、すなわち、自己の中に他者を持つ意識である。

西洋の哲学的枠組みは、人々が自分自身の存在を反省するために主体を仮定する必要があると考える。例えば、フランスの哲学者、精神分析家のジャック・ラカン（Jacques Lacan）の鏡像段階（Mirror Stage）論では、幼児は自分の姿を他者の鏡像としてみることによって、自分が統一体であることに気づく。さらに、人間は、他者を鏡にすることによって主体性を獲得する。ベルギー出身の哲学者のリュス・イリガライ（Luce Irigaray）は彼女の著書の『Speculum of the other woman』で、以下のような理論を提唱した。社

会生活において、女性は男性の存在を反射する鏡であり、男性は女性のことを、主体性を確立するための他者としてきた。男性の他者としての女性自身は凹面の膣鏡であり、自分を自我が映す他者にすることで、自分で自我の存在を確証できる。すなわち、男性に他者とされる女性は、自己の他者になり、自分自身の存在を反映しつつ、アイデンティティを形成していく。

本稿では、1949年から2019年までの70年間を、1.新中国建国初期における個の意識が隠蔽された時期（1949-1978)、2.文革以降、個の意識が転換した時期（1979-1989)、3.現代アートと併存する個の意識の覚醒した時期（1990-2006)、4.グローバリゼーションの進展に伴い多元化する個の意識が確証される時期（2007-2019）の、4つの時期に分けて論じる。

中国のような社会主義国家における女性のセルフアイデンティティ、イデオロギーの形成には独自性がある。西洋における女性解放の過程と異なり、新中国において女性解放運動が組織的、計画的、全国的に行われたことは皆無なうえ、父権制文化に対する根本的な批判から対案の提示を経て再構築されたこともない。また、西洋の女性解放運動は国家権力の確立後、その政権や制度に対して女性の権利を獲得するために行う社会活動であった。一方で、新中国におけるそれは国家建設と同時並行で推進された。このように、中国と西洋では、政治環境と時代の趨勢に著しい差異があったのだ。

新中国建国初期における個の意識が隠蔽された時期における女性による写真表現は、国家と政党の需要に沿ったものにすぎず、個人の意志の表出ではなかったと言える。文革以降、個の意識が転換した時期における女性の写真表現は、芸術写真へ変遷する時期が進展する中で需要されたものであり、社会変革を推進することが、写真家自身の責任そのものであった。現代アートと並存する個の意識の覚醒した時期における女性による汎写真表現（写真、写真を含むインスタレーション、映像作品など）は、女性の社会的属性を理解することを目的とする自己の脱構築であった。グローバリゼーションの進展に伴い多元化する個の意識が確証される時期における女性による写真表現とは、彼女たちの主体性の構築への需要に基づいたものであり、自身が自己の他者になる過程そのものなのである。

とりわけ、1990年以降に活躍し始めた一群の女性アーティストたちの影響力は、アジア地域を超えて、世界のアートシーンにも及んでいる。中国における芸術写真の発展の変遷を理解するための重要なファクターとして、本稿は、時代的な差異と女性写真家の創作との関係を軸に、彼女たちの個人の意識の変遷を論述の中心としながら、中国人女性写真家はいかに個を表現してきたか、すなわち、写真表現の多様性、ならびに多元的な主体性を構築する元の姿を還元していくことを試みる。

（論文審査結果の要旨）

許力静の博士論文「自己の他者　-中国人女性写真家はいかに個を表現してきたか- 」は、70年以上に渡る中国人女性写真家を対象とし、表現に刻印された個人意識の変容と「自己の他者」を発見してゆくプロセスに着目した研究である。

第二次世界大戦後、新中国の建国、文化大革命、改革開放経済、一人っ子政策、グローバリゼーションの進展など、大きな社会変動の波に洗われてきた中国人女性写真家の表現には時代精神の大きな変容が映し出されてきたが、そうした写真の流れを現在の視点からどのように捉え、評価すべきなのかが検証される。

本論は戦後から現在に至る各時代の女性写真家の分析を核とするが、女性写真家たちの多くは性別や女性性といった問題に正面から立ち向かうことなく、フェミニズムやジェンダリズムの二元論に陥ることもなく

、個の多様性と真実を見つめ、秘められた自己を解放する方法を写真で模索してゆく足跡が描きだされる。論文は5章に分かれる。

女性写真家の個の意識が隠蔽された時代を扱う第1章では、記録性に個が圧殺されていた状況が示される。その個の意識が次第に転換してゆく時期を中心にした第2章では、政治宣伝から離れ、個人精神の所在を確認してゆく様が描かれる。第3章では、海外からの現代美術の影響が急速に雪崩込み、そうした多様な要素を個の解放手段として認識してゆく状況が記された。

さらにはローカリズムとグローバリズムの狭間で個人の精神性の確認が進む時代を検証する第4章と、女性写真家たちが作品をセルフ・リフレクションの手段として用いて「自己の他者」となる段階を辿る第5章が続く。

こうした章立て構成から、表現形式や手法は多様でありながら、個々が手探りでそのスタイルを確立しようとする中国人女性写真家の志向が浮かびあがってくる。

表現規制の緩和や男性写真家との対比、セクシャリズムやエロティシズムの位相、日本や台湾等の周辺国との差異などの視点が欠けているが、中国人女性写真家の動向を全体として把握し、そのエッセンスを抽出しようとする姿勢を評価したい。多くの写真家や写真関係者へのインタビューやリサーチによる貴重な資料も折り込まれており、今後、こうした領域の研究に携わる者にとって有用な文献となることだろう。以上の理由から博士論文を合格と判断する。

（作品審査結果の要旨）

許力静の博士作品「女ム（女としてのわたし）－女性循環と大衆意識－」は、女性による写真表現の変遷を現代中国の視点からたどることにより制作された。教育、就職、結婚など、中国社会における女性の境遇は時代によって大きく変化した。その歴史性を可視化するため、許は異なる世代の女性の姿をモチーフとしている。

作品のタイトルに用いられた「女ム」は許が独自に造った字であるが、これは日本と中国における「他」という漢字の意味の違いに由来している。日本では「自分以外の」という意味で性別を限定しないが、中国で「他」は男性を指し、日本語の「彼」に相当する。一方「彼女」にあたるのは「她」であり、そこから「私」を女偏に置き換え、女性の一人称（わたし）を意味する字「女ム」を構成した。このことは作品主題においてアイデンティティーの問題が大きな意味をもつことを示している。

許の写真インスタレーション作品は大きく三つに分類される。一つ目は等身大に拡大され半透明の布に印刷されたヌード写真である。正面から撮影された被写体は三世代の直系血族の女性であり、肉体の変化が時間の経過を生々しくあらわにしている。透過性のある支持体の質感は、現在だけでなく過去の時間をも立ち上がらせる視覚的な効果をもたらしている。

二つ目は額装された肖像写真であり、33歳当時の許のセルフポートレートを軸として、曽祖母、祖母、母親、許の架空の娘がそれぞれ33歳の姿として制作されている。これは写真の記録性が含む真実性と、それを伝搬する写真の機能そのものに疑問を投げかけるものである。

それらは大きな新聞の見開きの上に展開されるような構成で展示されており、鑑賞者に開かれた作品であることを強調する。さらに「女ム新聞」と題された印刷物を自由に持ち帰ることができるようにすることで、ニュース情報が日々消費され続けられることを示しながら、アート作品に接することから公共という社会に開かれていくことを暗示する。つまり本作品が持つ三つ目の要素は、作品が展示によって鑑賞者と結びつくことを想定している点である。

自己存在を母、祖母、曾祖母と重ね合わせることで中国社会における女性の在り方を再考する本作品は、世代間に横たわるアイデンティティーの断絶を可視化し、展示を通して鑑賞者をも巻き込む循環を生み出そ

うとするものである。現代中国における問題意識から生まれた本作品は普遍的な主題も含有しており、博士号に値する作品として評価できる。

（総合審査結果の要旨）

許力静の博士論文「自己の他者　-中国人女性写真家はいかに個を表現してきたか-」は、女性写真家を対象として中国の近・現代史における社会変化の中での、その環境と個人の表現がいかに変化し、発展受容されてきたかを中心に書き上げたものである。新中国の誕生から、文化大革命、改革開放、計画生育政策やグローバリズム等の社会の変遷を経て、その社会と個人の表現の発展を巡り、女性写真家がいかにそのアイデンティティを確立したか。女性という社会的性別とは一定の距離を置き、創作行為を行うことによって自らの自我を再確認し、自己を客観的に認めることができるようなったとする。

本論は、5章に渡って構成され、第一章においては1949年の中華人民共和国建国から文革期には、個の意識が隠匿され政治の中にとりこまれたことを示し、第二章では、1978年に始まる改革開放時代からは、個の意識が転換し次第に留まることをしらずに発展していった芸術写真について記述する。第三章においては、1989年以降を中国の現代美術の始まりとし、海外の影響も大きなコンテンポラリーアートと併走することにより、長らく抑圧された個の意識が、社会の寛容性の増大により自発的に覚醒することを示す。男性の他者としての存在から自己によって客体化された他者としての女性自身、その自立を語る。第四章では、以降現代までの中国現代美術と写真表現の成熟期について、様々に活性化する様子を分析する。急激な社会寛容度の変化によって、非対立的、非批判的、非同一的ジェンダーという視座で世界からも注目される中国のアート状況について記述する。第五章では、さらに女性写真家の自己を反射させる鏡として創作を実践し、能動的に自らが自分の他者となる道筋について結論づけた。中国の社会変化とともに女性写真家の意識の変化に着目し、今日の発展の状況を分析した論文は、相対的な意味での世界への論述が足りないが、急激に発展した中国の女性写真家のあり方を分析した論文として十分に価値がある。

そして修了制作は「**女ム**（女としてのわたし）-女性循環と大衆意識-」と題された、写真作品を用いたインスタレーションである。許は、留学によって日本語と中国語の表現の違いに着目した。中国では他という意味には三人称男性の意味があり、她が同じ三人称の女性を意味することから、女性としての私を意味する**女ム**(わたし)という文字を創作しタイトルにした。作品は、自身と母親、そして祖母、という女系三代の裸体写真を紗にプリントし中空に展示、壁面には“**女ム**(わたし)新聞”がデザインされ、曾祖母、祖母、母親、自身、架空の娘の自らの現在の年齢と同じ時代のポートレートが額装され展示された。また、“**女ム**(わたし)新聞”は、自身、母親、祖母のそれぞれがプリントされた3種類のタブロイド新聞も別にあり、持ち帰り自由になって、観客の反応を読み取れるようになっている。さらに壁には「わたしは死んでいく。君も」という文が記され、人間の死とは、直後は一定のニュースになるが、新聞のように翌日になると価値がさがり、棄てられてしまう虚しさを表現しようとする。このように写真と言葉と印刷物を使った、空間と壁面に渡る意欲的なインスタレーションであり、透明素材へのプリントのあり方も新鮮である。最終的に作者許力静は、鑑賞者との相互的関係性をも用いて女性像をどう理解するかをテーマとした作品に昇華させた。この博士課程修了制作作品と論文とを総合判断して、課程博士、総合審査結果を合格とする。